

現代の
言語表現

Eメール—新しい書き言葉のスタイル

高本 條治

1・はじめに

電子メール（Eメール）は、一九九〇年代の書き言葉によるコミュニケーションを語る上で無視できない存在である。いや、それどころか、今後は手紙やファックスを追い抜いて、書き言葉によるパーソナルコミュニケーションの中心的手段になる可能性だってある。

もちろん、電子メールは、もはやそれほど新しいメディアであるとは言えない。商用パソコン通信ネットから小規模なBBSまで、これまでも電子メールは多くの人に積極的に利用されてきた。しかし、最近特に注目され、また広く利用されているのは、何といてもインターネット

トEメールである。この記事では、インターネットでやりとりされるEメールの、現時点での表現形式上の特徴と慣習について、具体的にまとめてみたい。

2・Eメールの表現形式上の特徴

Eメールのやりとりが行われるインターネット（注1）は、もともとアメリカ社会から生まれてきたものである。また、インターネットは、コンピュータ同士に巧みにデータをやりとりをさせ、情報を共有させるかという発想から生まれてきたものである。この二点は、現在のEメール（注2）の表現形式ともかわりを持っている。

図1は、インターネットメールの架空の具体例である。メッセージは大きく二つの部分、ヘッダ部とボディ部に分けられる。

ヘッダ部を見ると、差出人は「From: あて名は「To」という英語見出しの後に書かれている(①参照)。また、メッセージのタイトルは「Subject」という英語見出しに続けて書かれている(②)。そのタイトルの冒頭に付けられた「Re:」は「Regarding(〜について)の略(注3)」で、このメッセージが相手のメッセージに対する返信であることを示している。このように返信では、相手が使ったタイトルの前に「Re:」を付ける(注4)のが慣例になっており、多くのメールアプリケーションソフトでこの処理は自動的に行われるようになっていいる。

ここに見られるような和洋折衷ぶりは、Eメールを日常的に利用している人にとってはもはや何ら不思議な光景ではない。しかし、新しくEメールの世界に入ってきたばかりの人は、最初ちよつとした戸惑いを感じるかもしれない。たとえ日本人同士が日本語を用いたEメールを利用する場合でも、利用者にはアメリカ伝来の表現形式や用語法にある程度習熟していることが求められるのである。

また、インターネットでつながった別々のコンピューター

タが、統一的な方法で情報伝達を行えるように、人間同士のコミュニケーションにとってはそれほど重要だとは思われないような情報が、Eメールのメッセージの中には織り込まれている。図1のヘッダ部を見ると、その中には、人間にとつても重要なあて先・差出人・タイトル・日付といった情報のほかに、ファイルの転送経路や、他のメッセージから区別するための識別番号などが書き連ねられていることが分かる。これらは、Eメールの配送を行うソフトウェアによって自動的に付け加えられるため、本文がたった一行のメッセージでも、相手に届くときには数行から十数行に及ぶメッセージになる。

3・ヘッダ部での日本語表現(図の①②)

先の図で「To: 鈴木太郎 <suzuki@hogehoge.ac.jp>」という部分(①)は、あて先を示している。コンピュータにとって大切なのは「suzuki@hogehoge.ac.jp」というメールアドレスの部分であって、「鈴木太郎」という部分は人間のための言わば注記である(注5)。しかし、日本語の使い手にとつてはこのように漢字を使って氏名が書かれていると分かりやすくていい。

①のアドレスヘッダ(To:/From)や②のサブジェクト

図1 インターネットEメールの例

Received: from sun-cc. juen. ac. jp (sun-cc. juen. ac. jp [202. 25. 237. 1]) by host. hogehoge. ac. jp (8. 7. 5/3. 5Wp15) with ESMTp id MAA12345 for <suzuki@hogehoge. ac. jp>; Sat, 3 May 1997 12:15:35 +0900 (JST)
Message-Id: <199705100324. MAA11977@sun-cc. juen. ac. jp>

Date: Sat, 3 May 1997 12:15:29 +0900

MIME-Version: 1.0

Content-Type: text/plain; charset=iso-2022-jp

From: 高本 條治 <takamoto@juen. ac. jp>

To: 鈴木太郎 <suzuki@hogehoge. ac. jp>

Subject: Re: コンピューター利用講習会について

ヘッダ部

①

②

(空行)

③

こんにちは。 高本@上越教育大です。

講習会の案内受け取りました。今回は、たいへん盛りだくさんの内容なのでとても期待しています。私のところにも、この講習会について知りたいという方から問い合わせが何件か来ています。

④

- > 講習会終了後、懇親会を予定しています。
- > 会場は未定ですが、ぜひ参加して下さい。

⑤

もちろん出席します(^_^)v
大学院生も同席させていいですか？

⑥

院生とはいっても青森県から現職派遣で来ている高校の教員です。

⑦

ボディ部

ゞ(^) 高本 條治 (TAKAMOTO, Joji)@上越教育大学 (新潟県上越市)
Email: takamoto@juen. ac. jp, MHA00541@niftyserve. or. jp
WWW page: http://www. kokemus. kokugo. juen. ac. jp/

⑧

ヘッダ (Subject) に漢字など日本語二バイト文字 (いわゆる全角文字) を入れる場合、一般には「MIME」という規格 (注6) に従って変換した形式が使われる。MIMEは「多目的インターネットメール拡張 (Multipurpose Internet Mail Extensions)」の頭文字で、さまざまな文字集合でコード化された文書 (またはその一部) を印字可能なアスキー文字に置き換えることによって、インターネットメッセージとして送受信を可能にする仕組みのことである。

例えば、「漢字タイトル」という文字列の場合には、「ISO-2022-JP?B?G?R?C?N?E?T?E?I?U/?S?I?S?C?V?R?G?Y?K?」のように変換されて (注7) インターネット上を流れる。もちろん、このままでは読むことができないから、メールを受信したメールアプリケーションソフトの側で、これを解読して元の文字列に変換し直す必要がある。このMIME変換のおかげで、Eメールのアドレスヘッダやサブジェクトヘッダで自由に日本語が使えているわけである。

しかし、ソフトによってはMIMEの変換を自動的にはしてくれないものもある。したがって、相手が使っていないソフトがMIME変換に対応しているかどうか分からない場合は、ヘッダ部には二バイト文字を使わないようにした方がよいという考え方 (注8) もある。

また、以下に述べる「ISO-2022-JP」という規格の文字コードを使用する限り、サブジェクトヘッダではMIME変換は必要ないという見方 (注9) もある。ただし、ここは意見の分かれるところである。JIS方式では二バイト文字の開始位置と終了位置を表すためにESCコード (0x1B) で始まる制御コードを挿入するのだが、メール配信を行うプログラムのうち、古いタイプのものには、サブジェクトヘッダにESCコードが混入していると正常に動作しないものがあるからだ。

なお、インターネットのEメールで使われる日本語の文字集合は「ISO-2022-JP」規格 (注10) と定められており、これは「7ビットJISコード」とも呼ばれている。一般にWindows 95やDOSで使われているのはシフトJISコードなので、インターネットにメッセージを流す場合には事前にコード変換を行う必要がある。この作業も通常はメールアプリケーションソフトが自動的に行う。

注意が必要なのは、この規格では「JIS X 0201」に入っている一バイトのカナ文字 (いわゆる半角カナ文字) は使えないということだ。Windows 95のメニュー項目名やショートカット名には、スペースを節約するために半角カナ文字が多用されているが、インターネットに流すメッセージでは、メールヘッダ部に限らず半角カナ文字は使

用できないことになっている。インターネットで日本語Eメールを利用する場合には、このような点への配慮も必要となってくる。

4・Eメールの表現形式に関する調査

日本語を用いたEメールについて、現在どのような表現形式が標準的なのだろうか。今回、この点について大まかではあるが、ひと通りの調査を行ってみた。

調査に当たっては、インターネット上で配信されているニュースグループ「*fu.education*」と「*fu.mail*」の一九九六年一月一日から一九九七年四月三〇日までのログを資料として用いた。これはネットニュースと呼ばれているもので、Eメールとして送信された記事が不特定の人によつて閲覧できるようになっている。個人メールを調査資料に用いるのは、プライバシーの問題があると同時に大量に収集するのが難しいという問題もある。そこで今回は、ニュース投稿記事を書くのに用いる表現形式は、おむね通常のメールを書く場合の表現形式と一致すると仮定して、最初から内容が公開されることを前提としており、また、アーカイブ（記事集積）も充実しているネットニュース記事を調査資料に用いることにした。

ログに含まれる記事数は合計約八〇〇〇ほどであったが、ここではそのうち、上記の期間中にそれぞれのニュースグループで合計一〇回以上投稿を行った人の記事にしぼって調査した。投稿回数から見て、この人たちはEメールをかなり使いこなしている人たちであると言うことができる。そういういわばベテランの人たちがどのような表現形式をしているのかに興味があつた。調査の対象となつたのは、一一七名の人が投稿した延べ二五五九通の記事である（注II）。

調査・集計は投稿者ごとに行つた。記事によつて表現形式にばらつきがある人もあつたが、そのような場合はその人が最も安定して使用している表現形式で代表させた。なお、記事本文に含まれる引用部分は調査対象からは除外している。

ここから先は、その調査結果を紹介しながら、メールボディ部の表現形式について見ていくことにしよう。

5・Eメールならではの表現（図③⑤⑥⑦）

Eメールの具体例を示した図③には、「高本@上越教育大」という表現がある。@は英語の「at」を表し、この場合は「上越教育大の高本」という意味になる。これは、イ

ンターネットで使われるメールアドレスの書式(例 `suzuki@hogehoge.ac.jp`)にヒントを得た、Eメールならではの表現形式である。また、⑥には、文字を組み合わせて作った「フェイスマーク」(注12)と呼ばれる綴りが使われている。これも、パソコン通信やEメールによって広まった表現形式の一つである。Eメールでは表情、身振り、声の特徴などを伝えることができない。フェイスマークはその代役として、書き手の感情を相手に知らせる手がかりとして利用される。

行頭に「>」という符号(アスキーコードで 0x3E)が置かれた⑤は、相手から届いたメッセージを引用した部分である。「>」のほか、相手のメッセージの引用を示すには、「<」(0x3F・0x3E)、「^」(JIS 0x2164)、「>」(JIS 0x2155)、「…」(0x3A)、「—」(0x7C)などの符号がよく使われている。このうち最後の「—」符号は、プログラムソースや書籍などから引用をする場合に好んで使われる傾向がある。また、符号の前に相手の名前を付けて引用するという形式もある。

私の調査では、「>」を用いている人が最も多く六二・四%、次いでそれを二つ重ねた「>>」の一八・八%であった。以下、相手の名前+「>」が七・七%、「—」が六・八%、二バイトの「<<」が四・三%と続く。

なお、引用符号に類するものに、⑦の行頭に置かれている「#」符号(0x23)がある。これはその部分が書き手本人によるコメントや注釈であることを示すためのものである。この書き方は、UNIXのシェルプログラムなどで、「#」で始まる部分がプログラムの実行に関係しないコメントであることに由来している。

このようにEメールには特有の隠語的表現や慣用的形式があり、それが従来の書き言葉にはなかった新鮮さと機能性をEメールの表現にもたらしている。

6・1行の最大桁数と段落形式(図④)

インターネットの通信規約(プロトコル)やポリシーは、RFC (Request For Comments の頭文字)と呼ばれるドキュメント群(注13)にまとめられている。そのうちのRFC1468では、メッセージ本文の各行を画面上で八〇桁以内(なるべくなら七五桁程度以内)に収めるように勧めている。ただし、引用を明示するために各行の先頭に「>」符号を挿入した結果、この制限を超える場合はやむをえないとされている。八〇桁というのは、漢字などの二バイト文字では四〇字に相当する。

図に示した例の④では、六四桁に達した位置で機械的

に改行している。引用された場合、「>」などの符号が行の先頭に付け加わっていくため、そのことを見込んで一行の最大桁数はやや短めにしておくのがよいとされる。「ネチケット(注1)ガイドライン」をまとめた RFC1885(注15)では六五桁未満での改行を目安にしている。

文の途中で改行され、次の行に文が継続している場合に、一体何桁目に改行を入れているかを調査してみた。その結果、全体平均は六一・四桁となった。最長の人で七二・二桁、最短の人で五〇・四桁である。どうやら、六一桁あたりで改行するのが一応の標準値であると言えそうだ。

ところで、④は一定の桁数で改行することで、段落を箱型に整形している。このやり方だと、単語の途中でも改行されてしまうことになる。これとは別に、語や文節の切れ目で改行をするという方法もある。この場合、各行の桁数は不ぞろいとなる。今回の調査では、行末が不ぞろいになっても必ず文節の切れ目で改行している人が六二・四%と最も多かった。文節の切れ目ではないが語の切れ目で必ず改行をしている人は四・三%。それに対して、一定の桁数で改行して段落の形を箱型にしている人は三三・三%であった。

段落といえ、段落境界の示し方にも注目してみよう。図の④の部分はこれで一つの段落であるが、段落と段落

との切れ目が空行(一行空き)で明示されている。原稿用紙などで段落の区切りを明示するときには改行一字下げが標準とされてきた。しかし、Eメールではその方式はあまりとられていないようだ。実際、今回の調査でも、全体の八九・七%の人が空行で段落の切れ目を示し、段落冒頭の字下げはしていなかった。改行一字下げの人はわずかに四・三%。空行と一字下げを併用する人も六・三%と少なかった。

7・シグナチャ署名(図の⑧)

図の⑧は、差出人に関する情報である。多くのメールアドレスは、あらかじめ設定した内容や指定ファイルの内容を自動的にメールの末尾に挿入できるようにになっている。この部分は「シグナチャ」(署名)と呼ばれている。

「ネチケットガイドライン」(RFC1885)では、シグナチャ部分を付ける場合は、大体四行までにするのがよいとしている。ネットスケープ・ナビゲーターに付属しているネットスケープ・メールでも四行を超えたシグナチャを登録しようとする、「あなたのシグナチャは推奨値の四行を超えています」という警告が出る(Netscape 3.01 Goldの

場合。また、Windows 上で広く使われているメールソフト AL-Mail のヘルプファイルにも、「あまり行数の多いシグネチャは嫌われる傾向があります。一般的には四行程度が適当とされているようです」と書かれている。ただし、「シグナチャが六行か八行を超えたら場所の無駄づかいだと見られます」というように、許容値をもう少しゆるやかにしているものもある(注16)。

私の調査では、シグナチャを全く付けていない人は6%にすぎなかった。残りの九四%の人が、メッセージの末尾に何らかのシグナチャを付けている。行数ごとにパーセンテージを示すと、一行だけのシグナチャを付けた人が二〇・五%、二行の人も同じく二〇・五%、三行の人がやや多くて二二・二%、四行の人が二〇・五%、五行の人はがくと減って八・五%、六行の人が一・七%であった。全体の八三・七%の人が四行以下のシグナチャを付けているという結果になった。

8. おわりに

インターネットのEメールは、いまだ普及の途上にあると言つてよいだろう。したがって、Eメールの中で使われる日本語の表現形式も、まだ十分には定まっておらず、

局所的なルールや個人的な好みに応じて揺れ動いている部分もある。しかし、今回行った調査から、Eメールのベテランたちが採っている表現形式には、かなりはつきりした傾向性が見られるということが分かった。

冒頭でも述べたように、今後Eメールは、書き言葉によるコミュニケーションの中の主要な存在になっていく可能性が高い。そこでどのような表現形式や表現スタイルが選択されていくかは、日本語の書き言葉の今後を考えていく上でも重要な問題だと思われる。

注

- 1 インターネットの歴史を知るには次のWWWサイトが有益である。(1) Barry Leiner, et al. *A Brief History of the Internet*. <http://www.isoc.org/internet-history/> (2) Zakon, Roberto H. *Hobbes' Internet Timeline v2.5*. 1996. <http://info.isoc.org/guest/zakon/Internet/History/HTT.html>
- 2 Eメールの誕生と発展については、次のサイトを参照。Hardy, Ian R. *The Evolution of ARPANET Email*. 1996. http://server.berkeley.edu/virtual-berkeley/email_history
- 3 Lamb, Linda and Jerry Peek. *What You Need to Know Using Email Effectively*. O'Reilly and Associates, 1995.
- 4 同じメッセージへの参照が繰り返し行われるとき、「Re:」の付け方には幾つかのやり方がある。(1) 何度参照されたか「Re:

- 「TITLE」の代わりに「Re:」は一つだけ。(2)「Re: Re: TITLE」のように多重に「Re:」を付けつづける。(3)「Re: TITLE」のように「へき乗を示す」「」符号の後に参照回数を表す数字を付ける。(4)「Re*: TITLE」のように「乗法を示す」「*」符号の後に参照回数を表す数字を付ける。
- 5 ヘッダ部の書式は、RFC822 で定められている。
- 6 MIMEの規格は、RFC1521 と RFC1522にある。
- 7 ヘッダ部は通常、RFC1521 で規定されている BASE64 という方式 (Bコード化方式) で変換される。
- 8 H A T「インターネットメールの注意点」 <http://ux01.sourceforge.jp/~hav/imap/index.html>
- 9 市川新「サングジェットは日本語で書ける」 <http://weyl.math.tsukuba.ac.jp/~shin/kanjihheader/0/index.html>
- 10 日本語文字コードは RFC1468 に定められている。
- 11 次のような記事はあらかじめ調査対象から外した。(1) 本文に日本語が使われていないもの。(2) 本文が文字化けして判読できないもの。(3) 本文のほとんどが引用だけのもの。(4) 本文が極度に短いもの。また、異なったアドレスで送信された記事でも、署名などから同一人物であると確認できた場合は一本化して取り扱った。
- 12 高本條治「パソコン通信におけるフェイスマークの機能」、『日本語学』12-13、一九九三年
- 13 RFCの各ドキュメントは <ftp://ds.internic.net/rfc/> から入手である。また、RFCに関する情報は <http://www.isi.edu/rfc-editor/>、ならびにそこからのリンクで得ることができ
- 14 「ネチケット」はネットワークのエチケット。 <http://www.edu.u.ipa.go.jp/mirrors/togane-ghs/netiquette/index-j.html>
- 15 RFC1855 には高橋邦夫さんによる日本語訳がある。 <http://www.edu.ipa.go.jp/mirrors/togane-ghs/netiquette/rfc1855j.html>
- 16 Angell, David and Brent Heslop. *The Element of E-mail Style*. Addison-Wesley, 1994.
(たかもと・じょうじ 上越教育大学助教授)